

仕組みづくりの普及の潮流とグローバル化に期待

国際 P2M 学会会長 小原重信

いよいよ広く社会人に発信し交流の場と情報メディアが発刊される。学会誌に加えて解説論文や交流情報を掲載した会誌を定期刊行することになった。この優れた新しい情報メディアの企画提案は、さらに学会の発展に寄与すると確信している。2005年10月に10年の足跡を記した。多数の新設学会が雲散霧消する中で、幾多の苦難を克服できたのは、創設以来の会員、理事、評議員、事務会など絶大なご支援のお蔭である。とりわけ現名誉会長が重責を担った吉田邦夫東京大学名誉教授の運営指導力が多大である。

学会の発展には社会人に期待される情報と場が提供されねばならない。学会誌の発刊は、大学、企業内では得られない情報を提供し、自己成長、自己実現できる場を産み出すメディアとなる。学会の発展、研究の進化、査読付論文は、研究者の学位取得や実績に寄与する。しかし、その一方で学会の敷居が高く、読みづらい専門誌に専門家を除けば距離を感じる社会人が多い。最近では社会人が大学で再学習するコースもある。再学習にも企業支援が増えているが、時間とコストを考えると、学会に加入して直接会員と交流する道にベネフィットが大きい。その理由は、学会は業界慣習にとらわれず、現状打破、体験を抽象化、形式化の独自性や論理を重視する姿勢であろう。春秋の定期研究発表大会は、自己発想にコメントを受ける好機となる。その試練が社会人の能力形成と人生履歴変える可能性もある。そして、学会の魅力は、個人ではどう近づくか迷う著名な教授

や活躍する社会人にフェース・ツー・フェースで情報を得る機会が多い。

学会活動の使命は、日本型の価値創造を「仕組みづくり」の論理化と実践手法の開発である。その意義は、社会難題に苦悩するリーダーに体系と方法を与える機会となる。「学際よりも学際統合」をキーワードに選んだ理由は、理系・文系、理論と実践の4つの異なる領域を超える研究活動の重視である。機械、電機、情報の一体化で製品化する、医療分野に工学技術を活用して難病に取り組む、貧困格差社会を雇用環境や所得層で分析するなど自然科学や社会科学など同領域における学際研究が加速されてきた。しかし、グローバル化する社会ニーズに対応するためには、世界観、方法論に関わる「異領域を超えて」見解の対立、矛盾、前提の違いを前向きに論題とする姿勢がますます重視される。その難題について、クリステンセンは、ロボットよりも「生態系を守り、雇用を創りだし、人間が充実感を感じられる」イノベーションと積極投資を提唱してきた。この教示も指針として再考すべきであろう。

学会は10年の足跡を記した。多数の新設学会が雲散霧消する中で、幾多の苦難を克服できたのは、創設以来の会員、法人会員、理事、評議員、監事、事務会など絶大なご支援のお蔭である。この度、学会誌に加えて解説論文や交流情報を掲載した会誌を定期刊行することになった。この優れた新しい情報メディアの企画提案は、さらに学会の発展に寄与すると確信している。